

機関番号：84604

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～ 2010

課題番号：21820081

研究課題名（和文） 木簡の字形分析による日本古代の異体字の基礎的研究

研究課題名（英文） The Fundamental Study on the Variant Characters in Ancient Japan through the Analysis of the Character Forms on the Wooden Tablets

研究代表者

井上 幸 (INOUE MIYUKI)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部 特別研究員

研究者番号：30549241

研究成果の概要（和文）：主に奈良時代の木簡に書かれた文字（漢字）を対象に、その字形を分析した。中国の文字研究を参考にし、各用例を収集、類型化した。例えば、筆画の増減だけでなく、漢字の部分の位置交替によるものなど、多様な文字使用の実態が明らかになった。また、異体字が発生する背景をさぐるべく、文字瓦に現れる筆順を分析した。これらの検討から、日本古代の文字使用における、実態に即した異体字研究の基礎部分を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：The character forms on the Chinese characters were analyzed that were written on the Wooden Tablets in mainly Nara period. The examples were collected and typed, referring to the study of the Chinese characters in China. The actual conditions of the multiple uses of them were revealed, for instance, on not only about increasing and decreasing of the number of the strokes, but also about changing of the parts' positions of the Chinese characters. The types of stroke order of the characters carved on the tiles were also analyzed in order to search for the background of using of the variant characters. Through these examinations, the groundwork for the study on the variant characters could be laid, corresponding to the actual conditions on using the Chinese characters in ancient Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,080,000	324,000	1,404,000
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,050,000	615,000	2,665,000

研究分野：日本語学（古代文字・表記）

科研費の分科・細目：人文学・日本語学

キーワード：国語学、木簡、文字、異体字、日本古代

## 1. 研究開始当初の背景

日本古代の文字・表記について、特に漢字の字形・字体については、これまで、文学作品などの成立年代と書写年代に時差のある写本によるところが大きく、当時実際に書かれ今も遺る木簡や正倉院文書については、資料の公開や数量不足などの制約から、あまり取り上げられることがなかった。これにより、

異体字研究全般においても、後代の資料が中心で、古代の文字資料の特徴はあまり反映されていなかった。このような状況から、木簡にみられる筆画の実態を把握すること、またそれによって、異体字の分類など、再構築していく必要があると考え開始した。

また、研究代表者はこれまで正倉院文書について一部調査を行ってきたが、この資料群

については、取り上げたことがあまりなかった。しかし、日本古代の文字資料群においては、木簡という文字資料も重要な位置を占めていることから研究対象とした。

## 2. 研究の目的

本課題の目的は第一に、日本古代の木簡を中心とした多様な異形字における筆画のあり方の把握及びこれを生成する場、位相の分析による文字使用の実態把握と文字意識を明らかにすることであり、分析に際し、史学、考古学、中国文字学等に関する情報、知識の収集を進め、日本、中国の他の文字資料も参照しながら特徴をとらえていくことである。第二は、これらの成果を基礎として、実態に即した異体字研究を再構築することである。従来の日本の異体字研究に不足な部分を中国文字学から摂取、応用することによって、より体系的な記述を目指すものである。

また、文字資料の収集については、上記の研究をふまえ、これまで調査してきた他の資料や後世の写本資料との距離をはかるための足がかりを探ることにある。

## 3. 研究の方法

方法は、主に2方法からなる。一つめは、文字資料の収集と整理。二つめは、中国の異体字研究の整理と応用方法の模索である。

### (1) 文字資料の収集と整理

収集対象を主に平城宮・京出土木簡とし、収集した資料を整理した。これまで収集してきた木簡以外の文字資料における筆画の有り方についても随時参照した。木簡で収集できた文字種（異なり字数）は、約1400字種で、このうち、なるべく鮮明に筆画が追えるもの約1000字種を対象とし、一覧化して分析の便をはかるため、なるべく、デジタル化した画像1字ずつを整理して蓄積した。デジタル化した画像の収集は、奈良文化財研究所「木簡データベース」

(<http://www.nabunken.jp/0pen/mokkan/mokkan2.html>) や「木簡画像データベース・木簡字典」(<http://jiten.nabunken.jp/>) の公開画像を中心とし、これにないものについては、報告書等からデジタルスキャニングを行って収集した。

これらの材料を用い、特に画数および筆画の構成に注目し、異体字の類型において、いずれに該当するかの分類を行い、分析を行った（→成果(1)）。分析には、木簡という資料の特性を把握すべく、出土情報も考慮した。これは、木簡の記載内容を大まかにでも把握しておくためである。これは、文字が生成される場、位相に深く関わるもので、分析の際には考慮にいった。異体字の類型および分類については、中国の異体字研究の枠組みを参考にした。

## (2) 中国の異体字研究の整理と応用方法の模索

中国の異体字研究については、主に参考文献の収集と整理を行い、その枠組みをより広く取り入れられるようにした。日本の異体字研究においては、これまでの中国の資料も参照されているが、近年、敦煌文献の調査や整理が進み、異体字に関する研究も多くみられるようになった。この点を考慮し、近年発行された、字典や参考図書、論文の収集を行った。特に、日本においては、どのような参考文献が発行されたのか情報が不足しがちであるので、現地の図書館や書店において収集したり、学術雑誌の検索、入手したりすることによって、情報不足を補った（→成果(2)）。

以上の他に、これらの中心的研究に関連して、2つの調査を試みた。一つは、後世の写本資料（『万葉集』元暦校本）の字形を収集した（→成果(3)）。二つめは、文字瓦にみられる筆順の収集をおこない、木簡との異同をはかった（→成果(4)）。

## 4. 研究成果

研究成果としては、上記研究の方法で挙げた2つの作業によるものと、その応用として、後世の写本の一部との比較、異体字発生の背景に関連して、筆順の分析を行ったことである。

### (1) 木簡の文字資料の収集と分類・分析

収集した文字を、中国文字学の異体字分類における分類を利用して分類した。ただし、各字例数が多数あるものから僅少なものでかなりのばらつきがある。

多くみられた分類例は、以下の例である。

- ・増減（部分・一画一点）に関するもの
- ・部分の位置交替・構成変化に関するもの
- ・草書が楷書化されたもの

従来、筆画の減画については、部分に関するものが注目されがちで、一々の筆画の省略のパターンについてはふれられることがなかったが、筆画の上下など隣接する画を併合して減画することによって全体の構成を保っているものなど、一々の筆画を観察することによって、取り上げることができた。例えば、これは中国の異体字研究においては、“借筆”とされるものである。これまで金石文等の刻書の類や正倉院文書において調査していた例に木簡の例を加え、論文にした（→雑誌論文②）。また、位置交替の字例については、軽微な構成変化から、大きな変化を有するものまで多岐にわたっていることが確認できた。この字例については、論文にした（→雑誌論文①）。以上に分類しきれないものもまだ多くある。これらをさらに分類できる基

準の策定、およびこれまで収集してきた他の資料や中国の文字資料におけるその字例の有無などをさらに対照させなければならない。

また、筆画の構成を分析する上で有効な分析の一つとして、漢字の部分に注目することと、その構造（結構）分析を取り入れた。これは、漢字の各部分の配置、構造に関わるものである。違う文字種でも、同じ部分を持つ字例を集め、用例数の僅少さを補うことができる場合があった。また構造については、特に上記の前述の位置交替に関する分析に有効であった。

## (2) 中国の文字学の情報収集と整理

中国における近年の異体字の研究内容および字例は豊富であり、分類項目の検討に際し、大いに参考にした。特に分類項目についての大枠は日本の研究と大きく変わらないが、その下位分類においては、一点一画の観察に有効な視点を得ることができた。また、漢字の構造（結構）についての分析も詳細にあり、異なる筆画を相互に観察する際の手がかりも多く得られた。

また、研究文献の整理も行った。収集した図書資料の種類は、字典類、研究書、写真所載の出版物である。これらを刊行年の前後によって整理している。近年、敦煌文献の調査や整理が進み、異体字に関する研究も多くみられるようになったからである。

この他、中国で開催される文字学会において発表した（→学会発表④）、他の参加者の発表内容は、異体字に関するものが多く、大いに参考になった。当地における文字研究の最新の研究成果と広い研究対象にふれることができた。木簡資料については、直接関連はないが、その他の資料として、仏典の音義書などにみられる字形の分析については、取り入れるべきところが多くあった。

## (3) 後世の写本の一部との比較

奈良時代に成立した『万葉集』の、後世の写本（元暦校本）を利用し、木簡などの当時の字形との距離をはかるべく異同を観察し、口頭発表した（→学会発表①）。写本にはみられない字形も数点確認することができた。写本成立当時の字形の趨勢については、まだ未検討であり、今後の対照作業の基礎にすぎないが、その必要性は確認することができた。これによって、写本が保持している字形情報が作品成立当時の文字のありように近いのか遠いのかをはかることができると思われる。

## (4) 異体字発生の背景探求

収集した異体字の発生の様々な背景の一つとして筆順に注目した。筆順は、毛筆であ

る木簡からは判然としないが、文字瓦にみられる刻まれた痕跡を追った。文字瓦においても、一部の筆画の前後関係しか見いだせないが、この前後関係と毛筆における運筆における前後関係も少なからず関連性があるとみられる。例えば、先に縦画を書くことによって、横画が省略される可能性が高くなるわけである。このような観察を、毛筆資料に目をむけて再度観察すると、一部運筆が確認できる部分においては、その関連性が看取できる。これらの成果の一部を口頭発表および論文にした（→雑誌論文③、口頭発表④⑤）。異体字発生の背景を探るには、この他の要素もさらに検討すべきであるが、今後の異体字研究に活かしていきたい。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

①井上幸、漢字の部分の位置・配分の交替に関する異体字点描—日本古代の木簡の例を中心として—、水門一言葉と歴史—、査読無、22号、2010、pp.26-32

②井上幸、論日本古代文字資料中的減画—以借筆を中心—（中国語）、文字学論叢、査読無、5号、2010、pp.475-482

③井上幸、古代日本の文字資料にみられる筆順について—異体字形成の背景をめぐって—、東アジア日本語教育・日本文化研究、査読無、21号、2011、pp.1-12

〔学会発表〕（計5件）

①井上幸、万葉集の写本と古代文字資料の所用字体をめぐって、万葉語学文学研究会、2009年9月26日、奈良女子大学

②井上幸、木簡の異体字整理にむけて、上代文献を読む会、2010年2月21日、園田学園女子大学

③井上幸、木簡の異体字をめぐって—中国文字資料との対照をてがかりとして—、水門の会、2010年2月21日、甲南女子大学

④井上幸、論古代日本文字資料中的筆順（中国語）、第五届中国文字学学术研讨会、2010年8月12日、天津市 中国

⑤井上幸、古代日本の文字資料にみられる筆順について—異体字形成の背景をめぐって—、東アジア日本語教育・日本文化研究学会、2010年10月30日、遼寧省 中国

〔その他〕

展示図録

①井上幸、木簡の文字（解説）、奈良文化財研究所平城宮跡資料館秋期特別展天平びとの声をきく―地下の正倉院・平城宮木簡のすべて―解説、査読無、2010、pp.88-89

②井上幸、日本語表記にかかわる木簡（解説）、奈良文化財研究所飛鳥資料館秋期特別展木簡黎明―飛鳥に集ういにしへの文字たち―、査読無、2010、pp. 64-65

新聞・ホームページコラム

①井上幸、奈良時代の漢字 偏も旁も構成自在？、コラム 古代はいま（第 88 回）、朝日新聞（奈良版・25 面）、2010 年 2 月 5 日

②井上幸、「袋の中に衣が入ったような「袋」の字―漢字の部品の場所とりゲーム―」、奈良文化財研究所木簡ひろばホームページ内〈展示室、木簡ワールドへようこそ〉（[http://hiroba.nabunken.go.jp/home/tenji03\\_05.html](http://hiroba.nabunken.go.jp/home/tenji03_05.html)）2010 年 3 月 31 日掲載開始

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上幸 (INOUE MIYUKI)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・都城発掘調査部 特別研究員  
研究者番号：30549241

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：